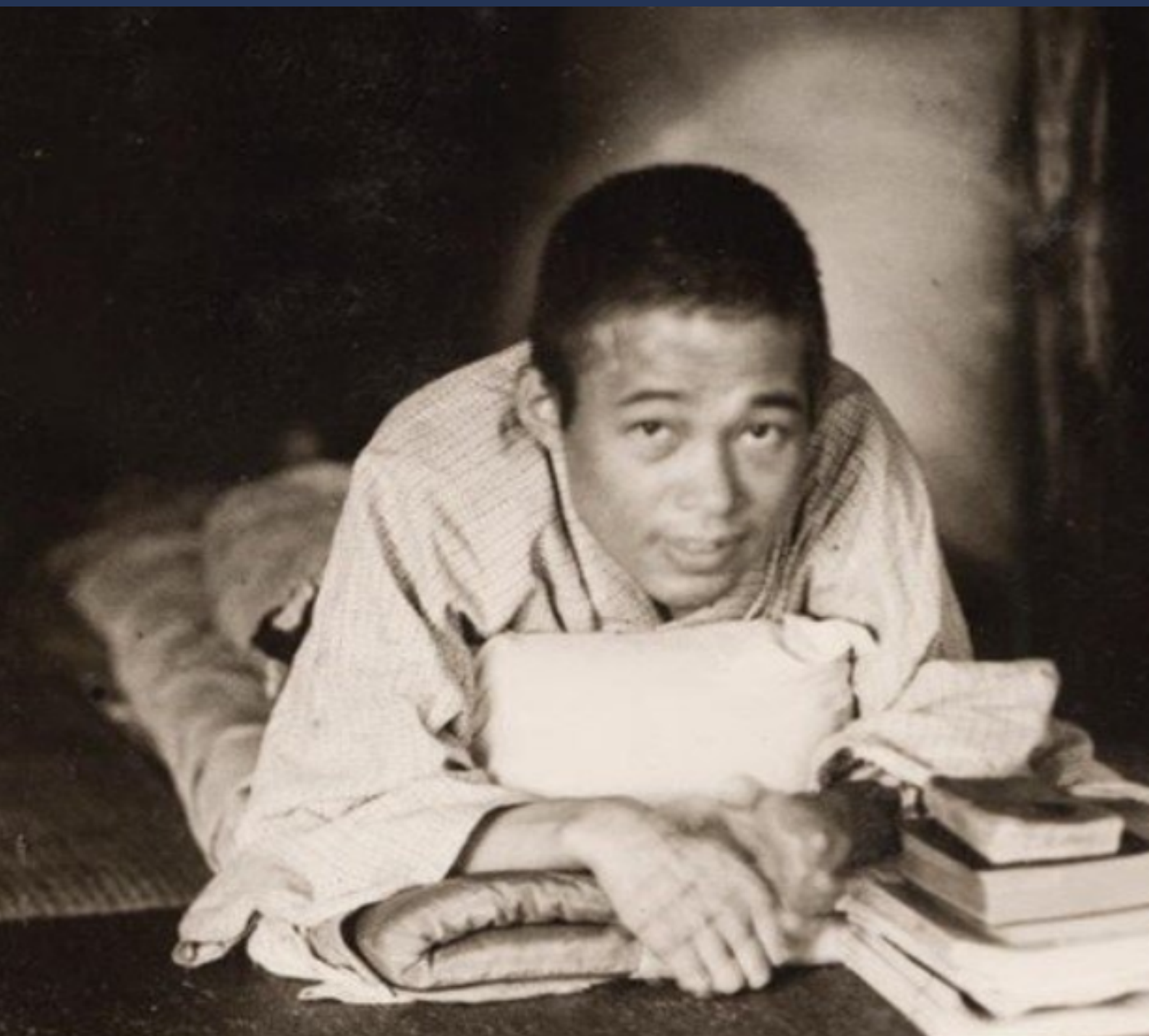


パウロ永井隆

(1908-1951)



永井隆は1908年2月3日、島根県松江市で5人の子供のうちの長子として生まれました。この地方は、日本人の文化、心、感性を形作った神道の真の発祥地の1つです。この伝統において、家族は親孝行、忠誠心、勇気の価値観で子供たちを教育します。家族は医学の実践に専念しています。祖父はすでに伝統医学を、現状では父親が母親の助力で西洋医学を実践しています。隆は日本の歴史の中で、200年以上に渡った鎖国の後、1854年から西洋との通交が再開され、強豪国と肩を並べるべく近代化が進む非常に特別な時期に生まれました。

つまり、米国およびヨーロッパ諸国のすべての科学分野の第一人者を呼び、学者を派遣して新技術の進歩について学びます。日本は急速に飛躍し、千年の伝統を揺るがし、発展神話への扉、特に学校、大学、知識人のサークルにおける唯物論的実証主義への扉を開きます。隆は非常に敏感な青年で、詩、絵画、スポーツの愛好家でしたが、後に、高校時代と長崎大学医学部の初期に無神論的実証主義の奴隷であったことを認識します。それは1930年3月のその日まで、死にゆく母親の枕元に緊急に呼ばれたとき、母のいまわのまなざしの中に、人は死では終わらないという何らかのしるしをつかみ、真実を希求する開かれた理性を彼が持っていることを証明しながら、それまでの考えを完全に覆しました。彼はもはや落ち着いてはいられず、生と死の意味探しつつ、その直感の奥底に行き着かなければならないことを理解します。ブレイズ・パスカルの「思考」は、この自己発見の道のを同伴しますが、すぐに一冊の本では不十分であることに気付くのです。彼は、何世紀もの間完全にキリスト信者の地域である長崎市北部の浦上地区に出かけて行って、実際にキリスト信者とはどのような人のことを言うのかを確認することにしました。浦上では天主堂の鐘が人々をアンジェラスの祈りに招くべく日に三度鳴り渡ります。



両親と隆

彼は森山家に下宿生として住み着き、後になってようやく、三世紀続く非合法で悲惨な迫害の期間、カトリックの信仰を受け継ぎ、語り継いできた潜伏キリシタンの指導者たちの子孫であることに気付きます。森山夫妻と一緒に暮らすことで、彼の偏見は知識と尊敬に変わり、彼は彼らの生き方と彼らの先祖の歴史を理解することを学びます。皆が口をそろえて彼の母親の死後、患者たちに接する彼の態度が変わったことを証言しています。

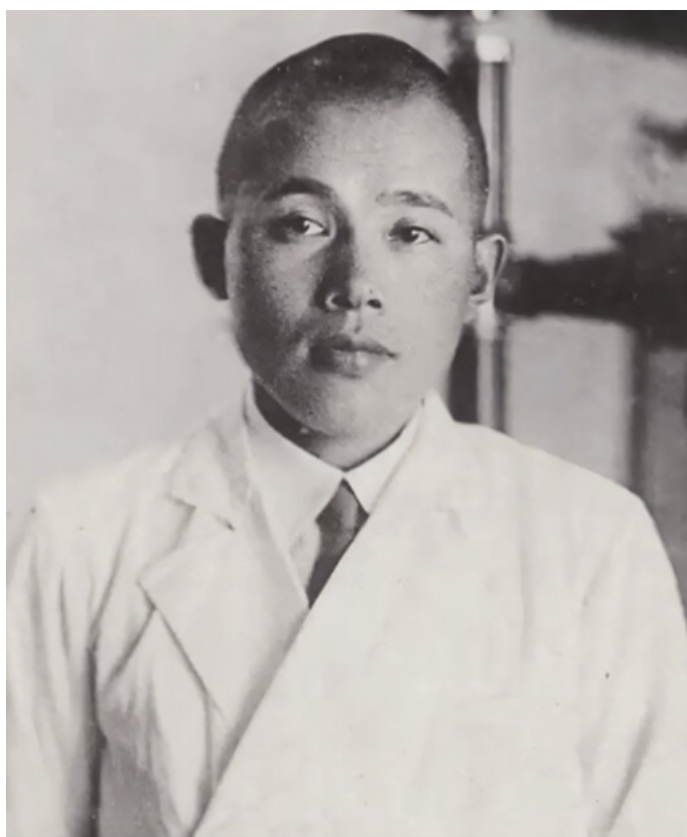
1932年彼は3月に彼は医学を首席で卒業し、大学に残るように招かれています。耳炎後の髄膜炎により、彼は右耳の難聴を抱えており、内科医になるという夢をあきらめ（もはや聴診器を使用できなくなり）、専門分野を変更します。彼は放射線科医になり、末次博士がヨーロッパから取り入れた新し分野にアシスタントとして臨床と研究の両方の分野での可能性にすぐに情熱を注ぎます。彼は自分自身を完全に研究に捧げ、夜遅くまで研究室にとどまり、彼の患者の中にはマキシミアノコルベ神父が診察を受ける機会が訪れます！ 1932年のクリスマス徹夜祭に、森山夫妻に夕食に招待されました。最初の日から、彼が病人を通してキリストを知ることができるようにと祈り続けている夫妻です。彼らはクリスマスについて話し、その夜には、教師としての仕事のために家から遠く離れて住んでいる娘の緑も出席しています。彼らは彼にミサに出席するように勧めます。最初は気が進みませんでした。彼はパスカルの言葉を心に留めて受け入れることにしました。彼は、以前は知らなかったはっきりと知覚できる存在に衝撃を受け、「私はまだ知らない誰かが私の近くにいるのを感じました」と言っています。翌日の夕方、仕事から戻ったとき、娘の調子が良くないと緑の父親から呼ばれました。それは腹膜炎に陥る急性虫垂炎です。雪が降っています。彼は彼女を背負って緊急手術をするために病院に連れて行き、彼女の命を救います。

1933年1月21日、隆には日本が戦っている中国との恐ろしい戦争への召集令状が届きます。彼は多くの兵士が戻ってこないことを知っており、彼の研究を未完成のままにしておくという考えに苦しんでいます。この悲しい精神状態で、出発の前夜、彼はドアをノックするのを聞きます。深くお辞儀をし「すみません、命を救ってくれてありがとうございます」と言いながら、病気の回復期に作った手編みのセーターを差し出すのは、着物姿の緑です。彼は、同じように規律正しい姿勢でその前に座って、無言でセーターを取り、彼女に口づけします翌日、隆は軍事訓練の場である広島に向けて出発し、その後中国に向けて出発します。

軍事訓練では武士の倫理に従って生じた軍事イデオロギーを身に負うのです。緑は毎日祈り、書きます。戦争の暴力に浸っている野営地で彼は緑が編んだ手袋、手紙、そして公教要理を受け取ります。彼はその本を読んで、これらの短い行間に、彼の生涯の質問に対する明確な答えがあるのはなぜなのかと驚きます。そして十戒を読めば、自分が汚れていて下品であると感じるのはなぜなのか？たとえ戦争が悲惨でも、彼の人生は変わり始めます。彼の著書の中で永井博士は、大砲によって引き裂かれ、切断された老人と子供たちの死体について述べています。軍部の主張は、日本人の仕事は非人道的なボルシェビキ政策と西洋の植民地支配を阻止することであると叫びますが、日本軍の残忍さは彼を深く悩ませます。科学と進歩の神話も消えます。パスカルは友として、神を知るためにはひざまずく必要があると彼に言います。

戦争に耐え失望し、長崎に戻った兵士の前には2つの選択肢がもたらされます。1つは、娯楽と酩酊に象徴される港の正面で、もう一つは、浦上天主堂、殉教者の丘、コルベ神父によって設立された修道院です。多くの帰還者がしたように、行って気を紛らすか、または緑を探してこのような自分を謝罪し、教会に行って光を探しますか？決定は下され、浦上に向かいます。

クリスマスミサを祝ったその司祭を見つけるために彼は教会の坂を登り、その司祭に、彼の目を輝かせ、司祭になることを可能にしたその確信を持ってどうやって信じることができるかを訊ねます。答えは彼の人生の話です。キリスト信者だったために牢で亡くなった祖父母、父親は牢獄に閉じ込められ、とても愛していた14歳の弟の殉教を見るという拷問を受けました。弟の最後の言葉、生きて浦上に帰り、妹は孤児の世話をし、生まれくる息子は司祭になるだろうという預言的な言葉を受け取ったというものです。



それは実際に起こりました。その預言の息子である司祭は、前線から戻ってきた自分を罪深いと思っているこの兵士を歓迎し、「福音は祈ることによって経験され、放射線学のように知性では理解できない」と祈るように勧めます。多田スワ：ひざまずいて祈ればわかるでしょう、あなたがイエスを知るためにイエスの胸の中にいることを！永井博士は放射線科での仕事を再開し、その間に洗礼のために教理の勉強を始めます。洗礼を受けるというのは簡単な決断ではありません。彼の父親はそれに反対しており、多くの障害があります。実際、軍国主義者の中ではキリスト教に対する敵意が再び頭を持ち上げ、大学においてさえそれは出世の妨げとなります。延期する可能性はあったにもかかわらず、永井はすぐに洗礼を望みます。パウロ三木の名前から自分の洗礼名としてパウロを選びます。緑は司祭の助言を受けて、代父となる緑のいとこと隆の正式な出会いを迅速に取り持ちます。しかし、隆は緑に結婚式の前に放射線科医として被るリスクを明らかにしたいと思っています。洗礼を受けた後、隆は根本的に新しい人になりました。彼は、敵、戦争、仕事、政治など、すべてを異なった見方、考え方で理解し、判断し、扱います。このことは彼の著作から明らかであり相対主義によって強く惑わされた世の中で、洗礼を受けた私たちにとって強い挑発となります。彼は幸せな父と夫ですが、この時期に自分の研究と患者に非常に気を取られて、経済危機の非常に困難な時期に、彼は妻に家の管理と経済と子供たち（4人の子供、そのうち2人は乳児期に亡くなっています）の教育を任せています。しかしながら、それは科学と慈愛を結び付けるものです。彼は聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会を知り、「貧しい人々への援助は、それが人の尊厳の回復に貢献する場合にのみ有効です」という会の精神に従って貧しい人々の世話をしています。多くのエピソードが彼の根本的な変化を示しています。特に、日中戦争でのその立場は驚くべきもので、満州での1937年の戦争は前の戦争と似ていますが、異なるのは隆です。洗礼は彼を新しい人にしました。彼の勇気は際立っており、負傷者のために薬を回収するために敵陣を突破するという一見不可能な企てを志願しました。彼は病人を助けることに疲れを知らないで、迅速で効果的な医療援助部隊を設立し、人員を管理し、敵の攻撃の最中でも迅速に手術することを学びます。彼はまた、負傷者を爆弾から守るために地下壕を作ることを学び、そして最も驚くべきことに、隆は日本人を助けるだけでなく、敵方の中国兵と彼らの上司も助け、彼らもその助けを受けたということです！特に、彼は中国の聖・ヴィンセンシオ・ア・パウロ会に、食糧や服を援助してくれるよう連絡を取ります。

隆は熱心な愛国主義者ですが、戦争と軍国主義を嫌い、今回、彼は祈りによって養われた新たな静けさを見出します。彼は特にロザリオに身を任せ、キリスト教の念仏とも言える祈り、福音書の節、詩篇、または短い祈りから取られた射祷を唱え始めます。あるエピソードは彼を特に試練にさらします。それは1939年のクリスマスイブのことで、中国人は奇襲攻撃をかけ300人の兵士を殺し、残りの兵士を全滅させるべく準備しています。連隊長は彼に軍旗の周りに負傷者を集めてガソリンをまくように命じます。敵に屈した場合には、彼らが敵の手に落ちないように火をつけなければならないのです。隆は一人にしてくれるように頼み、すべてを委ねて祈り始めます。ついに敵は撤退した! という伝令が到着します。当時、日本からの手紙で、緑の父と娘の郁子が疫病の流行で亡くなったことを知りました。隆の帰郷は劇的です。緑は幼い郁子の死が自分の責任であると自分を責め、日本は経済的にも道徳的にも打ち負かされていますが、軍は戦争の悲惨な結果について嘘をついています。隆は答えを求めてパスカルに戻り、そこで「キリストにおいてのみ、人間の惨めさと偉大さの矛盾は解けるのだ」、そしてその矛盾の解決法は「キリストの栄光のために生きること」であると見つけます。こうして、彼は、彼の帰国が「神の御子が、自分の仕事で御父に仕えることを望んでいる」とあるということを知ります。その変化は、病人や負傷者の世話を学生に教える方法や、日本の戦争参入を苦悩をもって見る方法にも表れています。

1945年の春、彼は慢性骨髄性白血病であると自己診断しました。これは、患者の利益と放射線科学の進歩のために自分自身を惜しまなかった放射線科医としての彼の仕事の結果です。

彼は、数年後には死んで子供たちを孤児にする必要があることを知っていたので、家に帰って緑にそのことを話す前に、パウロ三木の丘に祈りに行きます。はいと答えた最初の日から、すべてがすでに考慮されているという意識の中で、完全な信仰をもって答えることによって、再び彼を慰めるのは緑です。



緑がいなければ、永井隆は存在しなかったでしょう。神の摂理に完全に委ねられた彼女の存在は彼の歩みにとっての堅固な足場です。緑がいなければ、パウロ隆は存在しなかったでしょう。なぜなら、教会の道を歩む一人一人は、自分の召し出しに肉欲的な存在、別の存在のしるしを伴うからです。その間、戦争は激しさを増し、1945年8月9日に2番目の原子爆弾が長崎に投下されました。爆心地は浦上そのものです。その瞬間、隆は放射線の透視室で勤務中であつたので、頭部右側の動脈を切って重傷を負いはしたものの、生き永らえます。彼は外に出たとたん、恐ろしい光景を見ます。長崎の天主堂がある浦上のキリスト信者地区にはもう何も存在しません。約70,000人が生きたままの姿で焼け焦げになり、皮がはがれて即死しました。他の町からの援助が到着するまでの最初の2日間に、彼は絶望的な状況の中で休むことなく生存者の世話をし、3日後、緑が来なかったのは緑がもう生存していないからだということをよく理解して、彼は家に帰ることにします。彼は自分の家があつた場所に、焦げた骨のいくらかの残骸とそのそばに溶けた口ザリオとを見つけます。

翌日、彼は祖母と一緒に疎開した2人の子どもたちに母親の死を告げます。彼は長崎から6km離れた疎開先で生存者を治療し続け、8月15日、日本の無条件降伏によって第二次世界大戦の終結がもたらされるという衝撃的なニュースを伝える天皇の声をラジオで聞きます。喪に服しながら、彼は信仰の目で現実を観察し、祈り、しるしを識別しながら、その意味を悟ろうとします。1945年11月に教会の廃墟で執り行われた原爆による死者の追悼ミサの中では、その悲劇と浦上の多くの犠牲者について、戦争の終結と世界平和のための燔祭だと言います。

9月、隆は白血病と、組織への核放射線の影響で損傷したこめかみの大動脈が再び開いたことによる止められない出血のために死に瀕していましたが、どの医者も助かる見込みはないと述べています。姑はコルベ神父が建てた記念堂の泉から汲んだ聖水を飲ませ、隆はコルベ神父に祈るようと言う女性の声を聞きます。彼はその声に従い、突然出血が止まります。



1945年10月15日以来、草の葉が成長し、何匹かのアリが原子砂漠に再び現れるのを見て、彼はそこで人が生きるのが可能であることを理解し、古い家の廃墟がある浦上で、トタン屋根の下に住むようになります。そこは、家も愛する人も見つからない帰還軍人を受け入れ、何も残っていない場所で生活を再建し始める場所です。隆は皆に逃げるのではなく、自分と一緒に「至福の道を歩む」ように勧めます。

そして、彼の人生のこの最後の期間は最も印象的です：大学教授である彼は、彼自身と彼と会う人々のために、神との友情を生き、神と仲間になることによって、再びすべてが可能になり、生き生きとするという方法として、心の貧しさを求める道のりを、そして絶対的な物質的貧困の道を英雄的に歩み始めます。砂漠にいるイスラエルの人々のように「幽霊のような荒廃した浦上の中で神様と一緒に歩き、ついにその友情の深さを理解しました。」と言えるまでになります。彼は自分自身と自分の子供たちのためには最小限の必需品しか持ち合わせませんでした。人々の共通善のためには心を裂きます。友人と一緒に、瓦礫の下から教会の鐘を見つけ、それを高く上げて、1945年の悲しいクリスマスイブの夜に初めて鳴らしました。原子爆弾でさえ神の鐘を沈黙させることができないという、それは復興の始まりです！彼は人々に、自分自身と自分のいたみについて考えるのではなく、自分にできることをすることによって人生を再建するために働くことを勧めます。彼は本を書くことができ、そのおかげで得た初収入を、病院、学校、教会、図書館の再建のために全額寄付します。さらに、彼はその廃墟に美しさを取り戻すために、1000本の桜の木を植えることさえ決意します。彼の病気の進行は彼を1946年の初めから床に臥せさせ、1948年に彼は2平方メートルの非常に小さな小屋に住みに行くことを決心します。大きい方の家を兄の家族、祖母、子供たちに残します。この小屋を如己堂、自己愛の所、と命名します。彼が主との友情の中で苦行の歩みをするができる場所であることを示すために。彼自身が言っているように、聖フランシスコの清貧を模倣することが彼の願いです。彼はもはや夜に本や手紙を書く以外に何もできませんが、彼という人物そのものは毎日平和と慰めを求めて彼を訪れる何千人もの人々の光と希望の源になります。彼は「平和の神秘主義者」と呼ばれてきました。しかし、すべての隣人を受け入れるために、利己主義的な自分に対する深い苦行の成果であるその平和は、自分自身と現実に関わることなく他人に対して広場でスローガンを叫ぶ平和主義とは非常に異なります。そして、彼は、自分が中傷されても自分自身を擁護しないとき、自分でこの立場を証明します。

顔に現れる喜び（写真にも！）によっても明らかな、すべてのものへのまなざしの回心は、長崎のすべての人々と日本各地や他の国から彼に会いに来る多くの人にとって、平和と復興の原動力になります。彼が夜に手紙を書くハンセン病患者にとっても。確かに、彼が言っていることは本当に告知なのですがそうではなく、目に見えて会うことのできる彼自身なのです。実際、求められているのは彼の人物です。世界の多くの著名人（エヴィータ・ペロンやヘレン・ケラーなど）だけでなく、一般の人々も訪れ、さらには天皇自身、使者を二度送る聖座までもが、彼に会おうとします。

彼の人生は1951年5月1日まで毎日すべての人に捧げられています。最期の時がやって来たことを知り、彼は最初に担架でもう一度平和を祈るために教会に運ばれ、それから彼の病院に運ばれ、そこで彼は皆に祈るように勧めます。彼は亡くなりますが、その意向により、学生たちが学ぶことができるように自分の体を解剖のために提供します。彼の葬儀では、街全体が静まり、浦上教会の鐘の音に合わせてすべての教会の鐘と仏教寺院の鐘が、工場や港のサイレンが一斉に鳴り響きます。それは長崎中の偉大な市民への別れです。彼自身が作成した墓の碑文には、次のように書かれています。「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです」（ルカ17, 10）。彼の存命中に、彼の人生についての映画が作られ、俳優たちは彼に会いました。彼の家の近くの駅で歌が演奏されます。この映画は多くの宣教者たちの召し出しの中心に影響を及ぼしています。

1942年には日本のカトリック医師会の創設者の3人の内の1人となりますが、すでにイタリアのカトリック医師会は彼のことを知っており、1951年には彼の証しにとっても感動し、カララの大大理石で作られた聖母像を彼に送りました！

原爆が2発投下された日本では、今日でも、「叫びの広島、祈りの長崎」と言われています。その違いはパウロ永井隆博士によってなされたことは明らかです。彼の2平方メートルの小屋は巡礼の目的地であり、隆はその街で浦上の聖人として知られているため、「聖人通り」と呼ばれる通りにあります。

如己堂の永井隆



聖人とはまさに全うした人です。悲惨な歴史的状況の中で、隆は、医者としての使命と、子供たちに孤児として生きることがどんなに困難な道であるかを示して父親としての彼の使命を十分に果たしてきたことを認識する必要があります。彼は、完全に自分自身を与えるように導いた深い心の貧しさの中で、彼自身についての継続的な仕事と十字架とを通して全うしました。



如己堂で子供たちと



AMICI di
TAKASHI
e MIDORI
NAGAI